

小黒 修氏

● おぐろ おさむ ●

1975年神戸市生まれ、1999年神戸学院大学法学部法律学科卒業。2011年平成リハビリテーション専門学校作業療法学科卒業。

勤務先：医療法人 尚生会 アネックス湊川ホスピタル

所属：一般社団法人日本肢体不自由者卓球協会（理事、医科学委員、普及委員）、日本作業療法士協会 障害のある人のスポーツ参加支援推進委員会（委員）、兵庫県障害者卓球連盟（理事）



あの人に
interview
インタビュー

パラ卓球から見る障がい者スポーツの現在と未来

一年間の延期を経て、東京2020パラリンピックは8月24日～9月5日の日程を無事に終えた。コロナ禍の中での開催にあたっては賛否両論あったが、大会に向けて努力を重ねてきた選手達の姿には多くの声援が送られた。しかし、国内における障がい者スポーツを取り巻く環境にはまだまだ課題が山積している。今回は一般社団法人日本肢体不自由者卓球協会の小黒修理事から日本肢体不自由者卓球（以下パラ卓球）の現状についてのお話を伺った。

◎貴協会の活動内容について教えてください。

国際大会に派遣されるNational Team選手（以下NT選手）のサポートを行い、メダル獲得の支援が一番大きな活動になります。他にも候補選手や次世代育成選手達と一緒に合宿や国際大会に帯同してケアを行ったり、年2回の国内大会を開催しています。国内大会では好成績を残してNT選手に選ばれるべく、協会の会員が切磋琢磨をしています。

そういった競技志向でない方に向けては、最近はコロナ禍で開催できていないのですが、NT選手との練習会などを開いていました。また、このコロナ禍で運動が出来ていない会員に向けて、フィジカルトレーニングを紹介したりレッスンの作成なども行っています。

◎パラ卓球の魅力について教えてください。

それぞれがハンディーを持って

ハンディーを持っていても、それを覆す独自の技術やボールに向き合う選手の姿勢がパラ卓球の魅力です。

いても、それを覆す独自の技術やボールに向き合う姿勢が魅力です。私自身も足に麻痺がある中で卓球をしているのですが、障がいの有無に関わらず同じ土俵でプレーできるといふ事に誇りを持っています。パラ卓球をご存じない方に選手の一例をご紹介しますと、エジプトの選手でパラ卓球普及の第一人者であるイブラヒム・ハマト選手は両腕が無く、口にラケットをくわえるプレイスタイルです。サーブは足の指でピン球を掴み、トスして競技を行っています。「NO LIMIT」を体現されたプレーは世界中の人々に感動を与えていると思います。

「障がい者スポーツの父」と呼ばれるユダヤ系ドイツ人の医師ルードヴィヒ・グットマン氏は「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」という言葉を残しています。残存している能力の限界まで挑戦し、最大の力を発揮しようとする姿は生きる勇氣や感動を与えてくれます。

また、私が関わった選手の中に